

日本ナシヨナリズムと旧藩

「津軽」と「南部」を中心に

鈴木 啓 孝

一 福沢諭吉『旧藩情』における未来予想図

明治一〇年（一八七七）五月。この年の二月にはじまった西南戦争の戦火が未だ熾り続けるそのただ中であつて、「豊前中津奥平藩」に出自をもつ福沢諭吉は『旧藩情』なる小冊子を書きおろしている。

福沢はその「緒言」において、「維新の頃より今日に至るまで、諸藩の有様は現に今人の口撃するところにして、これを記すはほとんど無益」と述べ、明治一〇年当時において、旧藩という共同体カテゴリーの実在があまりにも白明であることについて言及している。だが、彼はこれに続けて、「光陰矢のごとく、今より五十年を過ぎ、顧て明治前後日本の藩情如何を詮索するも、茫乎としてこれを求むるに難きものあるべし」とも記し、明治一〇年から五〇年後の未来においては、今でこそ、その存在が当然である旧藩という共同体カテゴリーを確認することはきわめて困難なものになるだろう、との予測をなしたのであつた。

はたしてそれから五〇年の後、昭和の元号を用いる帝国日本はすでに複数の海外植民地を得ていたのであり、これら海外植民地やその他世界の諸外国に対して、いわゆる「内地」の人民が共通に保持した「わたしは「日本人」である」というアイデンティティは、すでに動かし難く確立していた。そして、その地点から回顧してみたとき、各々の固有名で表象される旧藩とは、昔は存在していたかもしれないが今となつては無用なものであり、国内の各地域を表象する際に用いられることのある、単なる言葉であるにすぎなかつた。すなわち、かつては個々の藩が一つ一つの藩国家として独立の歴史と文化を保存してきた事実などは、すっかり忘却の彼方にあつたのである。

二 戊辰戦争の敗者における旧藩

以上、福沢の「旧藩情」でも確認したように、明治前期を通じて、旧藩という地域カテゴリーは徒らな解消を許さぬ概念として実在していた。「藩閥打破」という言葉の流行からも窺えるように、明治前半期においては、その伝統的共同体原理が害悪とされ、消極的に捉えられる場合もあつた。このスローガンは、戊辰戦争の勝者であつたがために、明治初年において中央官僚として政府中枢を占めることができた「薩摩」や「長州」といった旧藩出身の士族たちに対して、そこから排除された戊辰の戦敗者たちが発した怨嗟の声にほかならなかつたからである。

だが、そのような消極的側面とは裏腹に、日本ナショナリズムが形成されようとしていた明治前半期当時、旧藩は人々の原初的な郷土愛の淵源となり、白らのルーツを地方にもつ人々の求心作用を生む磁場、すなわち「故郷」としての、積極的な価値をあわせもつていた。

ナショナリズム全般における郷土愛については、「ナショナリズムとパトリオティズムとの異同」という視点から、すでに多くの議論が積み重ねられている。例えば橋川文三氏は、L・ハーツやJ・J・ルソーらの理解を踏まえ、ナショナリズムとは「懐しい山河や第一次集団への本能に似

た愛情ではなく、より抽象的な実体、即ち新しい政治的共同体への忠誠と愛着の感情」なのであり、自然発生的な郷土愛ではないということ強調している。そしてその一方で、中央集権国家を作為するナショナリズムは、概念操作の段階でしばしば、原初的な郷土愛であるパトリオティズムを「有力な補完作用として利用」するとも指摘する。

だが、このような西洋社会から抽象された観念的ナショナリズム論を、そのまま日本ナショナリズムに後づけて理解するのみでは不足であろう。なぜなら、この理論が日本におけるナショナリズムの発生に直接基づくものでない以上、理論に対して現実を整合させてゆく段階で見過ごされてしまふ事象が必ずあり、その内にこそ、明治期に体系化する日本ナショナリズムの論理において特殊な、したがって本質的な要素が含まれる可能性を考えざるを得ないからだ。明治の初年から二〇年代に至るまでの日本において特殊である事情。それが旧藩という明治日本に特殊な共同体の存在なのだということを、まずはじめにおさえておきたい。

このような観点から、明治期における旧藩という地域カテゴリーの具体的実情に着目した研究が近年多くみられるようになった。明治初年における「故郷」を問題とし、「同郷会」という郷土的連帯に着目した成田龍一氏は、「同郷

会には旧藩が大なり小なり影響を与えて」⁽⁴⁾おり、「同郷会で「故郷」を軸に形成されようとするこの共同性は、国民国家の形成と相似形をなしている」とみなした。また、高木博志氏は、金沢や仙台そして弘前といった地方都市における旧藩顕彰の動きについて、主には日清戦争後の現象として整理しつつ、「明治前期にはつながりえなかつた「郷土愛」と「愛国心」との両者が、二〇世紀には連動してゆく」と評価した。つまり、多くの明治人において、「故郷」である旧藩への帰属意識は、「郷国」である「日本」への帰属意識に連続し、展開していったのである。当時において、二つの帰属意識及びその連続は、原初的・自然発生的であり、自明かつ当然のものであったが、日本ナショナリズムの作為を主導した中央政府の意向のみでない地方自治体や地方の名望家達による日本ナショナリズムへの主体的参加、あるいは、「官」の勢力のみではない「民」の勢力による日本ナショナリズムへの能動的参入の実態が、あらためて浮き彫りとなってきた。

「薩摩」や「長州」などいわゆる西国の雄藩出身者が、自身の所属する旧藩に対して素朴な愛着を感じ、また、戊辰の戦勝者としての自負心を抱き、そこから必然的に、郷里を同じくする者同上の結合を強くしていくのは自然な流れであろう。さてここで、「薩摩」や「長州」といった戊

辰の戦勝者たちの旧藩カテゴリーが存在していたのと全く同様に、戊辰の敗者たちが所属した旧藩である、例えば「会津」「仙台」「庄内」、そして「南部」など、当時の日本には数多くの旧藩共同体が存在していたことに目を向けてみよう。

西国の雄藩の出身者のみならず、「会津」や「仙台」など東国の旧藩出身者たちも、結局は戊辰の敗戦に至るものとはいえ、その時まで実に数百年間に及ぶ固有の歴史を共有して、強固な団結を維持していた場合が少なくない。「会津」や「仙台」などの士族たちについても、その藩国家に所属することは無前提に定められていたのであり、個人個人、戊辰戦争における敗者という属性は不可避なものとして引き受けざるを得なかつた。そしてそれゆえにこそ、彼らが政府中枢から排除されることは決定づけられたのである。

政府中枢から排除され、「藩閥打破」を叫んだ人々においても、現に実在している当の「薩長藩閥」に対抗するために集同化しなければならない。そしてその場合、「戊辰の敗者という汚名を返上しなければならない」という共通のテーマを掲げて、出自を同じくする者同上が自然に集まり協力しあうことになるため、さしあたり自分たちも「藩閥化」しなければならないはずである。したがって、逆説

的ではあるがむしろ彼ら戊辰の戦敗者においてこそ、旧藩共同体の速やかな解消と、その歴史の忘却とは不可能であったといえるだろう。たとえ、明治四年（一八七二）の廢藩置県によつて、藩という体制それ自体が消滅したとしても、そのことがただちに、かつての藩を磁場とする個人人の帰属意識や思考様式、そして共同体原理の解消を決定づけたわけではなかつたのである。

三 「津軽」と「南部」

「会津」「仙台」「庄内」「南部」などの旧藩は、現在ともに、日本の東北地方という同一の地域カテゴリーに所属するものとされている。そしてこの東北地方は、戊辰戦争時に奥羽越列藩同盟を結成して、西国諸藩を中心とする明治新政府軍、いわゆる官軍に対抗して敗北した、とされるのが一般的な理解といえる。だがこのような理解は、戊辰戦争が「過去の封建社会の内乱と違つて、戦後の処分ではほとんど大名の国替えがなかつた」ことによつて「地方的広さで敗者の地域が固定され」た結果生まれたところの後代の偏見にすぎず、実際にはより複雑な内実がある。⁽¹²⁾

慶應四年一月三日（一八六八年一月二七日）の戊辰戦争勃発を受け、同年五月、仙台において奥羽越列藩同盟が成

立した後、「仙台」「庄内」などととも、この同盟の枢軸として最後まで（明治元年九月へ一八六八年一月）まで官軍に敵対したのが「会津」と「南部」である。ところが、この同盟は結成後まもなく分裂しているのであり、南奥地方の「会津」は別にしても、北奥地方の「南部」が実際に戦戈を交えたのは、西国の諸藩などではなく同盟を離脱して官軍側に寝返つた同じ北奥羽の「秋田」と「津軽」であつた。この内、後者の「津軽」は、「南部」にとつて慶長八年（一六〇三）の幕藩体制成立以前の宿怨浅からぬ、まさに数百年来の仇敵といふべき存在であつた。⁽¹³⁾

奥羽地方における戊辰戦争が最終局面を迎えていた明治元年九月二三日（一八六八年一月七日）未明、突如、約一八〇名から成る「津軽」の軍勢が「南部」領内に攻め込み、約二〇〇名から成る「南部」の守備隊と戦闘するに至る。これが野辺地戦争である。「南部」はこの直後の九月二四日（一八六八年一月八日）には政府軍に対して正式に降伏を申し入れており、戊辰戦争自体が長期化せず終結したため、「津軽」と「南部」との直接戦闘は激化せず

に済んだのであるが、「津軽」「南部」両藩の武士たちにとつて、この戦闘の意味は決して軽いものではなかつた。以下に掲出する資料からは、野辺地における戦闘の開始時において、「津軽」の武士たちによる自藩（白国）に

対する素朴な帰属意識と、敵藩（＝他国）の「南部」に對するおさえ難い反感とが、ともに原初的なものとして表出しているのが確認できる。

而して其の死の尤も憐れむべく又尤も嘉みすべきもの、斥候山田要之進なりとす。此の人天資堅実にして虚飾なし。進軍の前夜同勤の知己、齋藤治郎作氏（現今、璉と改名す）に語りて曰く、今夜の進撃僕初めて、多年の積鬱を消散するなりと喜色満面に溢れ、豪気勃然剣を抜き、舞ふて戸壁を乱斫す。又曰く、兄よ、明日の戦は私戦に非ずと雖も、一は朝恩に報い、一は藩祖以来の怨敵を屠戮せん時と思へば、実に千載得がたき好機なり。僕明日潔く決戦し、南部人の心胆を挫折すべしと。滞陣中に於ける数十通の書類を焼棄して一物を遺さざりき。当時、辞世一片を帛布に書して之を戦砲の肩に結べり、曰く、

落葉なす あだを見ながら 散らさずば

吹き返さじな 外のはまかせ 楯雄^①

津軽藩士の山田（要之進）楯雄は、九月二三日の戦鬪で戦死してしまつたのであるが、「藩祖以来の怨敵を屠戮せん」「南部人の心胆を挫折すべし」とは、当時における「津軽」の武士一般の感情を代弁していたとみなすことができる。むろん「朝恩」の語にも注目しなければならぬが、やは

り、ここでより強調されているのは「津軽人」の反「南部」意識の方だろう。明治元年における、反「南部」感情を多分に含む「津軽人」の自己の意識は、山田楯雄のものと同じく異なるものではなかつた。

戊辰戦争時においても噴出した「津軽」と「南部」との対決心理は、その後も霧散してしまふことなく残存し続けた。こうした「津軽人」の感情は、さらに時代がくだつた明治二十年（一八九三）においても依然として確認することができる。以下は、旧津軽藩出身の歴史家だつた外崎覚（安政六く昭和七年へ一八五九く一九三三^②）による、内藤耻叟（文政一〇く明治三六年へ一八二七く一九〇三）著『徳川十五代史』^③に對する反駁書の一節になる。

『徳川十五代史』の表記で「世間に於て故らに津軽家を毀害せんと欲するか如きの文句を用ゐたる者、左の數條の多きに至れり。即ち「自称す近衛太政大臣云々」「世々南部に臣たり云々」「為信後安信か孫信直に叛く云々」「虚に乘し悉く三郡を奪ひ云々」「自ら津軽右京亮と称す詐て言ふ云々」「後永く南部と同列たりと雖も実は南部の叛臣なり」等なり。嗚呼、覺輩の如き津軽地方に成長して數世の間其恩沢を蒙ふる者の感情に於ては、憤慨悲憤、誰か如此の言を放つ者の肉を喰ひ、其骨を水火にするを欲せざる者あらんや^④。

旧水戸藩出身の内藤がまとめた徳川時代の歴史書において、津軽家は「自称す近衛太政大臣」「世々南部に臣たり」「為信後安信か孫信直に叛く」「虚に乘し悉く三郡を奪ひ」「自ら津軽石京亮と称す詐て言ふ」「後永く南部と同列たり」と雖も実は南部の叛臣なり」などと表現され、一貫して南部家の「叛臣」として扱われる。外崎は、「薄弱なる証拠、疎漏なる取調を以て如此断定を下せしは、実に公明正大の思慮を欠く」と述べて、内藤の判断が主観的にすぎるとし、歴史研究者としての客観的批判を試みているのだが、それにしても、「徳川十五代史」のような「南部」側に立った歴史論を公にした内藤に対する「津軽人」外崎の怒りは、「如此の言を放つ者の肉を喰ひ其骨を水火にするを欲せざる者あらんや」といった表現にあらわれるごとく、きわめて主観的であり、それだけに激烈でもある。

さて、この主観こそ、廃藩後二〇年以上を経た明治二六年になつても、依然実在していた「津軽地方に成長して数世の間其恩沢を蒙ふる者の感情」であり、原初的・自然発生的な郷土愛の典型と認められるだろう。外崎によれば、この反駁書はもともと内藤耻叟個人に向けたものであり、世間に公開する意図はなかったのだが、「知人共余に勧めめて」^⑧を印刷に附し、広く世間に頒布」するように「再三の勸言に及はれた」ため、公刊されるに至つたというこ

とである。^⑨ここから、外崎の知人である多くの「津軽人」たちにも、「津軽地方に成長して数世の間其恩沢を蒙ふる者の感情」が自然に共有されていたことが窺えよう。そしてそのような武士的な「感情」が「印刷」され「広く世間」で——全国的にとりより青森県津軽地方で限定的に——読まれることによつて、明治の世においても「津軽人」意識は生産され続けていくのである。^⑩

先述したように、中央集権国家を作為するナシヨナリズムは、しばしば、原初的・自然発生的な郷土愛であるパトリオティズムを「有力な補充作用として利用」する。したがつて、明治前半期を通じて「南部」への対抗心を決して棄てることができない「津軽人」の事例でみた、藩国家（＝白国）への帰属意識の表明は、やがて成立する近代国家としての日本（＝白国）に対する帰属意識に引照して、非常に興味深いものといえる。^⑪

「故郷」に対する原初的な愛着心（＝愛郷心）は「故国」に対する原初的な愛着心（＝愛国心）として動員されてゆく。幕末維新期の武士たちが、白らが所属する藩のためその命を懸けることができたように、明治以後の「日本人」たちもまた、白らが所属する祖国「日本」のために力を尽くすべきことが称揚されたのだ。そしてそれと同時に、このような「故国」に対する原初的な愛着心（＝愛国心）こ

それが、他国への対抗心や敵対心を生み出す、そもその淵源ともなつてゆく。

四 超克される旧藩

一方、その小さな国同士の対立感情は、ほかならぬ「津軽」「南部」出身者によつて客観視され、超克されるケースもあつた。その一例として、以下、「南部」の出身で近代日本を代表する教育家に成長した新渡戸稲造（文久一、昭和八年へ一八六二—一九三三）が、昭和三年（一九二八）の講演で述べていたことを確認しよう。

私等は子供の時に岩手県で育つたが、そのの南部藩は日本でもずつと北の方であるが、私の国よりもつと西北に津軽藩がある。この津軽藩と南部藩とは、背中合せで、犬と猿みたいに仲が悪かつた。道路を作るのも、南部藩で道路を作るのと、津軽藩で作るのは、ずうとつと合はないやうに持つて来る。道路並木を作るのにも、南部藩で赤松を並木にすると、津軽藩では黒松にするといふやうに、決して協同的にやらなかつた。何故といへば、それは敵愾心を養つておかぬと、事ある時に、南部のものが津軽に附いたり、裏切つたりする懸念があつたからで、これは日本ばかりではな

い。

諾威と瑞典などは、言葉も少しは違ふが、人種も同じであるし、先づ東京辺と私の郷里の辺の相違ぐらゐである。同じ言葉で訛りの違ふぐらゐのもので、例へばイプセンの書物ならば、諾威語で書いてあつても瑞典人には悉く読める。大きな声で読むと少しは聞へるけれども、理解する上には一向差支へない。文学はお互に共通といつてよいくらゐになつてゐる。けれども、私も自分で経験し実験したことであるが、スカンヂナビアといふ言葉を使ふと、大へんいやがる。

「スカンヂナビアではない。諾威は諾威、瑞典は瑞典で、決して同じではない。」

といふ。葡萄牙と西班牙にしても、吾々はあれをアイベリアン・ペンシユラといふ。ところが西班牙人に聞くと、葡萄牙などと一緒になつて、共同の地名を戴くことを潔しとしない。葡萄牙も同様である。

新渡戸において、かつては根深く実在していた日本内部の小さな藩国家同士（「津軽」対「南部」）の対決心理（＝「敵愾心」）がしつかり把握され、それがより大きな次元、すなわちヨーロッパ世界における国民国家同士（「諾威」対「瑞典」「葡萄牙」対「西班牙」）の対決心理に比況されている。だが、そのような自国對他国の対決心理は、図式化され、

相対化され、克服されるべきものとして描き出されてゆくことになる。以下は、同じ講演で、「愛国心Ⅱナシヨナリスティック・マインド」と「国際心Ⅱインターナシヨナル・マインド」について新渡戸が述べていたことである。

国際心、即ち、インターナシヨナル・マインドといふ言葉がある。国際心といつても、別にさういふ心があ
るのではない。たゞ心の持ち方である。心の態度である。故に誰にも用ひられ、また人の意志によつてはど
うにでもなる。

例へば、ここに国際問題があつて、仮に相手が亜米
利加、此方は日本とすると、ナシヨナリスティック・
マインドで見れば、どうしても自分の国の利益のため
に、これを解決せねばならぬ。「マイ・カントリー・
ライト・オア・ロング」といふ言葉が示す如く、是で
あれ非であれ、俺の国だから、といふ。これはナシヨ
ナリスティック・マインドで、これが眞の愛国心かど
うかは知らないが、普通にいふ愛国心には違ひない。
自分の国の利益ばかりを思つて、ちつとも先方のこと
は考へない。

けれどもインターナシヨナル・マインドといふもの
は、さういふ場合に、向うのことも一通り聞いて、な
るほど、それもつともだと、或程度までは先方の説

を容れ、此方で譲つてやるといふくらゐに、いはゞ高
い所からこれを見る。或は一步退いて、その問題に当
る。それに嵌り込まないで、客観的にこれを見る。即
ち、この心の持ち方がインターナシヨナル・マインド
であると、かく私は考へてゐる。

前の資料で確認した他国に対する「敵愾心」と同じよう
な心のもち方として、ここでは、「愛国心Ⅱナシヨナリス
ティック・マインド」があげられ、「自分の国の利益ばか
りを思つて、ちつとも先方のことは考へない」ことが問題
とされている。そして新渡戸が、その反対概念である「国
際心Ⅱインターナシヨナル・マインド」の必要性こそを訴
えていることがわかるだろう。

新渡戸が「愛国心Ⅱナシヨナリスティック・マインド」
を超越して「国際心Ⅱインターナシヨナル・マインド」を
主張するそもその前提には、彼の「故郷」である「南部」と、
「南部」にとつての敵国である「津軽」との対立感情があつ
た。そしておそらくは、「南部人」である新渡戸稲造自身
の感情としても、「故郷」に対する原初的な「愛国心」と、
敵国たる「津軽」に対する「敵愾心」とは、ともにおさえ
難いものとして実感されていたはずなのである。

ただ、だからこそ新渡戸はそのような「南部」に対する
「愛国心Ⅱナシヨナリスティック・マインド」を相対化する

ることができた——「愛国心」がはじめから存在していなければ、その存在が認識され客観視されることはあり得ない——のだといえる。そしてそれゆえに、新渡戸をして「国際心」という「心の持ち方」あるいは「心の態度」の実現可能性も確信され、それは「人の意志によつてはどうにもなる」のだと喧伝されることになったのだと考えるべきであろう。

五 再び福沢諭吉『旧藩情』より——地域的断絶と階層的断絶

以上にあげた事例にもみることができたように、明治前半期においては確かに実在していた隣りあう「津軽」「南部」二つの旧藩の磁場は、両藩の出身者たちが明治期以後に記した論説文にさまざまなかたちで影響を与えていた。本論を結ぶにあたって、そのまとめを行っておきたい。

まず、先に取りあげた「津軽」出身の外崎覚の所論と「南部」出身の新渡戸稲造の所論とを対比してみよう。すると、「津軽」の外崎の例でみたような「愛国心」は克服されるべきであり、「南部」の新渡戸が主張した「国際心」の育成が大切であるというような結論がくだされる場合が往々にしてあるのではないだろうか。だが、ここで私は、そう

いう現在の日本において共感しやすい実践的態度を歴史の中から発掘して、その「心の持ち方」や「心の態度」が現代社会において必要であるというような主張をなすためにこれらを引用したわけではない。むしろ、そういったありきたりの結論を提示して思考停止に陥るような事態を歴史的見地から相対化してみたいのである。

そもそも、新渡戸が主張したように「国際心」の獲得と保持が「人の意志によつてはどうにもなる」のかといえれば、これは決してそう樂觀できることではない。現に、新渡戸が例示したスカンジナビア半島やイベリア半島に実在する「民族」同士の対立感情は、二〇一一年現在においても依然根強いものがあるし、実のところ「津軽」と「南部」の区別も完全に消失してしまつたわけではない。世界を見渡せば、新渡戸の講演から約八〇年を経た今でも、ある国やある地域社会において他国・他民族に対する「敵愾心」を克服して「国際心」を養成することはきわめて困難であり、それは「人の意志によつてはどうにもならない」という方が真実に近いのではないだろうか。

したがつて、現在において採用すべき実践的態度についての議論はとりあえず保留した上で、明治年間を通じて「津軽」「南部」の両地域には戦国期由来の対立感情が残存し時には再生産されていたこと、そしてその場が、「愛国心」

の實踐と「國際心」の理念という相反する二つの思想を生み出す母体となつていたこと、さらには、そのどちらもが近代日本を通じて一定の説得力を有していたこと、以上三点が確認できれば充分である。

さてここで、冒頭に掲げた福沢の小冊子「旧藩情」を再度振り返つてみたい。実は、この小冊子で主要な問題とされてきたのは、今みた「津軽」対「南部」のような白藩（＝白国）と他藩（＝敵国）との間にあつた地域的断絶の方ではない。地域的には例えば同じ「中津」でありながらも、その中で実在した差異、すなわち士、農、工、商の差別、さらには同じ士分の中における上士と下士との差別という階層的断絶の方であつた。明治初年を生きた士族たちにおいては、旧藩を媒介としてかつて同じ主家に仕えた者同士の間には、簡単に霧散することはなかつたのだが、同じ士分の中の上士―下士の別という階層の違いもまた、近代以前の社会状況においては所与のものであり、ほとんど「天然の定則」ですらあつた。それを以下の引用で確認しておこう。

上下兩等の士族は、權利を異にし、骨肉の縁を異にし、貧富を異にし、教育を異にし、理財活計の趣を異にし、風俗習慣を異にする者なれば、自から亦其榮譽の所在も異なり、利害の所関も異ならざるを得ず。榮譽利害

を異にすれば又從て同情相憐むの念も互に厚薄なきを得ず。譬へば、上等の士族が偶然會話の語次にも、以下の者共には言はれぬことなれども此事は云々と云ふことあり。下等士族も亦給人分の輩は知らぬことなれど彼の一條は云々とて、互に竊に疑ふこともあり憤ることもありて、多年苦々しき有様なりしかども、天下一般、分を守るの教を重んじ、事々物々秩序を存して動かす可らざるの時勢なれば、唯其時勢に制せられて平生の疑念憤怒を外形に発すること能はず、或は忘るゝが如くにして之を發することを知らざりしのみ。

福沢が述べるところにしたがうと、「上下兩等の士族」は、「權利」「骨肉の縁」「貧富」「教育」「理財活計の趣」「風俗習慣」「榮譽」「利害」のすべてを異にしていたのであり、そのために「同情相憐むの念」を互いに抱くことができなかった。

そして、このように「上等の士族」と「下等士族」との區別が歴然としてあつた一方で、戊辰戦争に参加した板垣退助が、「夫の会津が天下の雄藩を以て称せらるゝに拘らず、其亡ぶるに方つて国に殉ずる者、僅かに五千の士族に過ぎずして、農商工の庶民は皆な荷担して逃避せし状を日撃」していたように、「士族」と「農商工」とも峻別され、一部の士分の者を除いた多くの人民が自分の居住している

藩国家の興亡に責任がなく、したがって主体的関心をもち得ない「客分」の状態にあつたのである。

だが、このような近世由来の階層意識に基づく彼我の区分は、明治一〇年（一八七七）の福沢がなした予言通り、それから五〇年後の昭和二年（一九二七）までにほとんど克服されてゆくことになる。本論の冒頭部でも述べたように、昭和二年時点において帝国日本はすでに複数の海外植民地を獲得しており、これら海外植民地の人民に対していわゆる「内地」の人民が共通に保持していた「わたしは「日本人」である」というアイデンティティはすでに動かし難いものだったのだ。それゆえに、昭和三年（一九二八）の新渡戸は、講演で過去を振り返った際に、かつての旧藩共同体における人民間の断絶について自国（＝「南部」）対他国（＝「津軽」）という地域的断絶の方を問題視し、それについて言及することができた一方で、同じ「南部」の中に確かに実在していたはずの階層的断絶についてはついに思い出すことがなかったわけである。

したがって、この時の新渡戸は、「国際心」の理想を説くべく「南部」対「津軽」という地域間の対立感情を素材として用いたことによつて、実は本人の意図に反して、「日本」及び「日本人」の内部における自国への「愛国心」と他国・他民族への「敵愾心」の存在を強調し、それを近代

における日本ナショナリズムの本質として刻印してしまっているのである。だがその一方で、彼は、かつての日本に実在していた士対下士、あるいは武士対農工商といった対立感情を隠蔽することには成功しているのであり、やはり本人の意図しないところで、「日本」及び「日本人」における近世由来の階層的断絶の忘却に貢献したのだといえる。すなわち、彼の主張そのものではなく、彼が主張しなかつたことの方に、より重大な意味が隠されているわけである。

このように考えてみると、ちょうど日清開戦の前年にあたる明治二六年（一八九三）の「津軽」において、「津軽」の旧士族である外崎覚によつて書かれたパンフレットが「印刷に附」され「広く公開」されることが目論まれた事実からも、あらためて日本ナショナリズムの形成に関連する重要な意味を見出すことができるだろう。つまり、かつては武士のみに限定されていた「津軽地方に成長して数世の間其恩沢を蒙ふる者の感情」——「故郷」である「津軽」への帰属意識——を、旧武士階層に限らないすべての「津軽人」へと拡散させてゆく思想的運動という側面である。新渡戸による「国際心」の称揚に反して、こちらは、むしろ積極的に地域間の対立感情をよびおこし、そのことで「津軽人」における「津軽」に向けての愛郷心＝愛国心を保存

しようとしていた。だがそれによつて、かつて実在していたはずの「津軽」内部の異なる階層間の対立感情は隠蔽され、やがて忘却されてゆくことになるのである。

水平レベルの地域的断絶の存在について積極的に言挙げすることで、かつて実在した垂直レベルの階層的断絶の方が隠蔽され、劇的に忘却されてゆく——つまり、一見相反する主張をなしていたかのようにみえた「南部」の新渡戸と「津軽」の外崎だが、実は両者は、期せずして、郷土愛Ⅱパトリオティズムを媒介とした人民の団結にリアリティをもたせつつ、それと同時に、旧来の階層間差別に言及しないことによつて「日本人」を水平化し統合するという日本ナショナリズムの作為に、ともにあづかつていたのである。

かつて下士であつた福沢諭吉が「門閥制度は親の敵で御座る」との意識のもとに、明治以後、階層間差別の解消に心血を注いでいたことは周知の話である。「学問のすゝめ」や『文明論之概略』などの主著における幕藩時代の批判はいうに及ばず、本論で取りあげた『旧藩情』における言挙げからも、そのような福沢の意図を読みとることができよう。そしてこの福沢の意図が、明治ゼロ年代の啓蒙思想として新聞や雑誌に印刷され、その記事を読んだ青年たちの内心へと刷り込まれていたのだ。

『旧藩情』が書かれた明治一〇年（一八七七）当時、「津軽」の外崎寛は一八歳、「南部」の新渡戸稲造は一五歳で、二人はほぼ同世代であつた。将来の彼ら二人は、それぞれ異なる時点で、異なる論点において、異なる立場から、まるで正反対の主張をなしたのだが、しかし彼ら二人は、確かに、同じような社会的状況の中で同じような意識を形成していたと評価することができるのである。

〈註〉

(一) 福沢諭吉『福翁自伝』（明治三年（一八九九）六月）慶應義塾編『福沢諭吉全集』第七卷（一九七〇年、岩波書店）七頁。旧藩の固有名に關しては、ここで福沢諭吉が「豊前中津奥平藩」と記しているように、①旧国名（豊前）、②藩庁所在都市名（中津）、③藩主家名（奥平）と、三通りの表記が考えられる。これに倣うと、例えば「薩摩」「長州」は、それぞれ「薩摩・大隅鹿兒島津藩」「長門・周防萩毛利藩」ということになるが、これでは煩雑になるため、もつとも一般的な通称と思われる①旧国名（薩摩／長州）で統一して記したい。だが別の例として、本論文で主に取り扱う旧藩は、それぞれ「陸奥弘前津軽藩」「陸奥盛岡南部藩」というように①旧国名が同じものになるため、この場合は区別の必要上、やはりもつとも一般的な通称である③藩主家

名（津軽／南部）を用いるのが適當に思われる。また、「陸奥會津松平藩」などの場合は、①旧国名（陸奥）と③藩主家名（松平）において同名の旧藩が多数あるため、消去法で②藩庁所在都市名（会津）を使うほかなく、それがもっとも一般的な通称になっている。よって本論文では、旧藩の旧行名に関して、①旧国名、②藩庁所在都市名、③藩主家名のいずれかですべてを統一するのは不適當と判断し、各旧藩ごとに現在もっとも一般的な通称を適宜選択して、それを一貫して使用することにしたい。

(2) 福沢諭吉「旧藩情」（明治一〇年（一八七七）五月）同前『福沢諭吉全集』第七卷、一六四頁。

(3) 同前。

(4) 成田龍一「故郷」という物語——都市空間の歴史学（一九九八年、吉川弘文館）参照。成田氏のいう「故郷」と旧藩一般とは概念的に全く同一といえない。私見では、その差異は一般的「故郷」と異なり旧藩には「土族的連帯」としての特殊性が存する点にあると考えているが、この「土族的連帯」あるいは「土族としての自己意識」については本文上に後述する。その要点をあらかじめ述べておくと、土農工商という近世由来の階層的断絶を超越し、どのような階層出身であっても郷里を同じくするという理由だけで同胞意識を感じられるようになるためには、近代ナショナリズムの洗礼を受けねばならないことなのである。以下本論文では、原初的郷土愛の根源であり、明治前半期の日本において特殊な旧藩共同体と概念的に近しいカギ括弧

付きの「故郷」と、単なる出身地の意味である一般名詞の郷里とを、用語上区別している。同様に、本論文で使用するカギ括弧付きの「津軽」や「南部」などといった地域名称は本文に説明する通り特殊な意味を含んでおり、単なる固有名詞として使用される津軽藩・南部藩または青森県などとは概念が異なることを明記しておきたい。「津軽人」「南部人」などとカギ括弧付きで表記する場合は、その人々が、その名で表象される共同体に対して無前提に帰属しており、したがって、「土族的な自己意識」を多分に保持しているということを示す。

(5) 主な例として、橋川文三「ナショナリズム」（一九六八年、紀伊國屋新書）序章や、H・コーンらの議論を下敷きとした澁谷浩「陸羯南の政治批評の論理」第一節「保守政治の論理」（一九九四年、北樹出版）を参照。

(6) 前掲橋川「ナショナリズム」三七頁。

(7) 同前二二頁。

(8) 前掲成田「故郷」という物語のほか、例えば、高木博志「桜とナショナリズム——日清戦争以後のソメイヨシノの植樹」西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』（一九九九年、柏書房）一四七—一七〇頁、同「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの——近代における旧藩の顕彰』『歴史評論』第六五九号（二〇〇五年三月、校倉書房）、真辺将之「明治期「旧藩士」の意識と社会的結合——旧下総佐倉藩士を中心に」『史学雑誌』第一一四編第一号（二〇〇五年一月、史学会）などを参照のこと。

(9) 前掲成田『故郷』という物語』三九頁。

(10) 同前五八―五九頁。

(11) 前掲高木『郷土愛』と「愛国心」をつなぐもの』一七頁。

(12) 佐々木克『戊辰戦争——敗者の明治維新』(一九七七年、中公新書) 二一九―二二〇頁。

(13) 津軽藩の成立事情及びその歴史の概略は、今野敏「津軽藩」豊田武編『東北の歴史へ中』(一九七三年、吉川弘文館)第二章第八節を参照のこと。津軽藩は、南部家の一家臣であった津軽為信が、それまでは南部氏の支配下にあった津軽地方(現在の青森県の西半分)を切りとり、戦国末期の天正一八年(一五九〇)において豊臣秀吉から所領安堵されたところに発祥の由来がある。その後、中央の政局を巧みに読みとつた為信は、秀吉について徳川家康からも所領を保証された。こうして、為信を藩祖として成立した津軽藩はそのまま幕末・明治まで存続し、「津軽」という地域観念が成立する——同時に南部藩も幕末まで一貫して存続し、「南部」という地域観念が成立する——ことになる。これによって、有名な「津軽」と「南部」の対立抗争がはじまることとなった。津軽氏が南部氏を快く思う道理があるはずもなく、南部氏にとつても津軽氏ほどのかたきはなかつた。そして、これは藩主一族間の問題であるだけでなく、各々の地域に暮らす領民間の問題ともなったのである。江戸時代を通じて、津軽南部両藩は「種々の経済的葛藤からことごとくに領民間の争いが絶えず」「犬猿もただならぬ関係にあった」(『岩手県史』第六卷(一九六二年、岩手県)

二〇五頁) ようである。

(14) 野辺地戦争の概況については、前掲『岩手県史』第六卷、九一―九三頁、及び旧版『青森県史』第五卷(一九二六年、青森県)五八八―六二六頁を参照のこと。

(15) 「津軽藩誌附録」太政官日誌(明治二年(一八六九)二月) 前掲旧版『青森県史』第五卷、六一〇―六一二頁。

(16) 外崎覚については、川村欽吾「外崎覚略伝——明治の津軽人(一)」『東奥義塾研究紀要』第九集(一九七六年)を参照。

(17) 明治二五―二六年(一八九二―一八九三)、博文館。

(18) 外崎覚『徳川十五代史中津軽の條を弁論するの書』(一八九三)〈明治二六〉年九月) 四三頁。

(19) 同前四二頁。

(20) 同前一頁。

(21) 明治二〇年代―三〇年代頃の弘前における旧藩顕彰の概要については、前掲高木「桜とナシヨナリズム」及び、同「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの』一一―一四頁を参照。歴代津軽藩主の記念祭や藩史編纂などの事業において中心的な役割を果たしたのが外崎覚であった。旧上族を中心とした運動は、弘前城址公園の整備とその一般公開、各種式典への市民の参加、さらには学校教育を通じて、旧上族に限らないさまざまな階層の人々を「津軽人」として統合していったと考えられる。

(22) 以下ここでは試験的に、旧藩を通じた結集原理についてエスニシテイ概念を用いて理解してみたい。社会学で使われるこの概念は、研究者ごとに定義があると言われる

ほど多岐多様なものである。エスニシティに関する基本文献は近年膨大な量となっている。ここではその歴史学への応用として、A・D・スミス『ネイションとエスニシティ——歴史科学的考察』（巢山靖司・高城和義他訳、一九九九年、名古屋大学出版会）[Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*, 1986]を参照する。エスニシティ

という分析概念を定義することは本論の目的ではないので、さしあたって同書の定義にしたがえば、それは、①集団の名前・②共通の血統神話・③歴史の共有・④独自の文化の共有・⑤ある特定の領域との結びつき・⑥連帯感と、六つの基準で捉えられている（二九〜三九頁）。旧藩のすべてがエスニツク共同体として認められ得るか、その適合不適合の度合いは各々の藩の特徴にしたがってさまざまだろう。だが、本章の考察対象である旧藩「津軽」は、この基準に照らしてみた時、①「津軽（あるいは弘前）」の名前・②擬制血族としての武士団組織を維持するにあたって信奉された藩祖為信の津軽統一神話・③幕藩体制下二六〇年間因替えのなかつた既定事実が称揚された歴史の共有・④特立的で統一度のきわめて高い津軽方言に象徴される独自の文化の共有・⑤津軽富士岩木山とその麓を流れる岩木川によって具体的にイメーじされる風景との結びつき・⑥仮想敵「南部」を常に意識することで生じる強固な連帯感と、エスニツク共同体としてすべての条件を十分過ぎるほどに満たしている。そして何より、前掲資料中の山田要之進楯雄や外崎寛が表明していた「感情」こそが、明治期において確實

に実在していた「津軽」という共同体の結集原理について、「旧藩エスニシティ」として把握することの妥当性を担保してくれているといえよう。

(23) 新渡戸稲造『西洋の事情と思想』（昭和九年（一九三四）昭和三年（一九二八）の講演速記で新渡戸の死後に刊行された）『新渡戸稲造全集』第六卷（一九六九年、教文館）五二—三頁。

(24) 同前五二—三頁。なお新渡戸は、「日本人」によってしばしば唱えられる「愛国心」なる言葉は、実は歴史的伝統もなければ哲学的理想もない、ただの新造語なのだと言破し、それを批判していた。「近頃の我国では愛国心が最後の決定になって、愛国心を持ち出せば何でも御尤もに通じ、愛国心以上の思想はないやうである。時には人道に反しても愛国心を尊重するような傾向がないでもない。そして此の愛国心なる者が吾々の偉大なる進歩を妨げる場合なきにもあらずである。一体日本人の中で愛国心の語源を知って居る者は少いやうである。愛国心と云ふ文字は古事記になく日本書紀になく、日本外史にもなければ、国史略にもない、勿論徒然草などにあらう筈はない」（新渡戸稲造『人生雑感』大正四年（一九一五年）、明治三九〜大正二年（一九〇六）一九一三）までの講演速記、同前『新渡戸稲造全集』第一〇卷、九五〜九六頁）。

(25) 新渡戸稲造の祖父である新渡戸伝（寛政五〜明治四年（一九七三〜一八七二）こそ、先に本文中で触れた野辺地戦争の終戦処理を担当した南部藩幹部の一人であった。よ

って、新渡戸稲造個人としても、「南部」に暮らす人々が「南部人」として敵国「津軽」と対決した記憶と決して無縁ではなかったといえるのである。

- (26) 園田英弘・濱名篤・廣田照幸「士族の歴史社会学的研究——武士の近代」(一九九五年、名古屋大学出版会) 一〇五頁の表現より。

(27) 前掲福沢『旧藩情』『福沢諭吉全集』第七卷、二六六頁。

(28) 同前二七一頁。

- (29) 板垣退助監修『自由党史』(明治四三年へ一九一〇、引用は岩波文庫版上・中・下巻へ一九五七〜一九五八年)による) 『自由党史』上巻、一八〜一九頁。

(30) 牧原憲夫「客分と国民のあいだ——近代民衆の政治意識」(一九九八年、吉川弘文館) 八頁。福沢諭吉と板垣退助には民衆における客分意識の払拭という共通の政治的課題があったといえ、階層間差別の解消と平等な国民の創出が目指されたわけである。

- (31) E・ルナン「国民とは何か」[Ernest Renan, *Quest-ce qu'une Nation?*, 1882] 『国民とは何か』(鶴飼哲訳、一九九七年、インスクリプト) 四七〜四八頁。ルナンによって示された「歴史の忘却」は後に読み直され、B・アンダーソンが提唱した「想像の共同体」論を支える重要なテーマとなった。この点につき、B・アンダーソン『想像の共同体——ナショナルイズムの起源と流行』(白石さや・白石隆訳、一九九七年、N I T T出版) [Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origins and*

Spread of Nationalism, 1983(Revised edition, 1991)]を参照のこと。新渡戸による『武士道』(明治三年へ一九〇〇)の執筆・公刊も、本来武士に限定されていた道徳をかつての農工商を含むすべての日本人の道徳として拡散させたものであると考えれば、それは、かつては歴然と存在していたはずの階層間差別の隠蔽に無意識的に寄与したといえる。

(32) 前掲福沢『福翁自伝』『福沢諭吉全集』第七卷、一一頁。